

A 7 女子短大生の家族関係 —祖父母・孫関係—
上野学園短大 ○遠山千代子
桜美林短大 広橋比刀美

【目的】高齢者の長命化や出生児の減少化などの影響で、今後の「祖父母・孫関係」は、期間の長期化と内容の濃密化とが予想される。本研究は、孫である女子短大生が祖父母の実態をどの程度認識しているか、また祖父母に対してどのような意識を抱いているかをとらえて考察することを目的とする。

【方法】女子短大生（東京都と埼玉県）を対象として、1991年6月中旬～下旬に自記式質問紙法による調査を実施した。有効数は293票である。

【結果】①対象者1人につき健在祖父母は平均1.9人（祖父0.6人、祖母1.3人）があり、祖父母との同居経験者（過去に同居も含む）は34%であった。②健在祖父母の実態認識度を「祖父・祖母」「同居・別居」「父方・母方」を分析軸として比較したところ、年齢・趣味・収入源についての認識が「同居」で高かった。③健在祖父母に対する意識は、幼い頃世話になったと感じるのは「同居」で、現在の気持ちとして好きなのは「母方」で、将来必要があれば介護するのは「同居」もしくは「祖母」で高かった。なお、幼い頃の世話・現在の気持ち・将来の介護の間には関連が見られる。④同居祖父母については、生活時間のズレや煩わしさはあるものの物心両面の長所が特に「祖母」に多い。⑤別居祖父母は近距離（所要時間1時間以内）は4割以下で、交流頻度は全般に低く訪問や電話を年数回程度にすぎない。但し祖父母が単身または夫婦のみの場合は交流頻度が高くなる。⑥諸条件を同じくする事例を比較したところ、祖父母に対する意識は、「祖父よりも祖母」「父方よりも母方」にプラスのイメージが強く、「同居・別居」については流動的であった。